

2021- December  
No.122

# 桜建会報

# OKEN

## contents

### 創立100周年記念 座談会

#### 特集◎一世紀を超えて、これからの展望する—— 2

理工学部建築学科

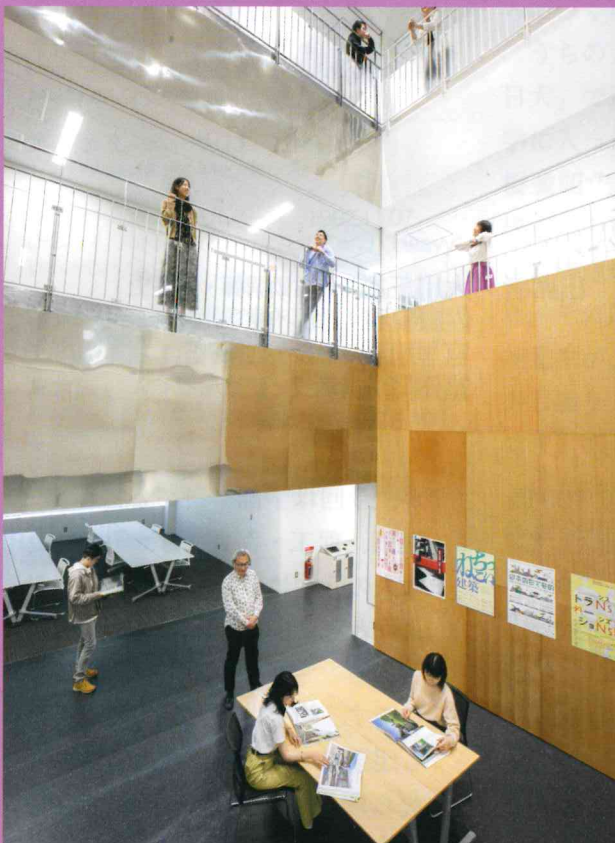
大川三雄 × 佐藤慎也 × 宮里直也 × 冨田隆太

研究室紹介 —— 12

地域デザイン研究室 都市計画研究室 意匠・計画研究室

事務局だより —— 14

学部ニュース —— 15



上は駿河台校舎1号館。夜間は行燈のように内部が透ける。(写真/北嶋俊治)、  
左はタワー・スコラにある建築学科の3層のフロアをつなぐ吹き抜け (写真/川瀬一絵)

## 創立100周年記念座談会

# 特集◎ 一世紀を超えて、これからの展望する

日本大学建築系学科の同窓生が集う桜門建築会は、  
来年、創立100周年を迎えます。

10年前の90周年では、各専門分野別に先生方をお迎えし、  
日本の高度成長期以降の建築界や大学の様子を振り返る特集を実施しました。

100周年の今回は、各学科ごとに先生方においでいただき、  
100年の来し方、行く末を考える座談会を行いました。

第1回は、理工学部の建築学科。

来年1年をかけて、工学部、短期大学部、  
生産工学部、理工学部海洋建築工学科の座談会を紹介する予定です。

### その1 ● 理工学部建築学科

## 理工学部建築学科の4つの転換点

都市講座・1号館・JABEE・タワー・スコラ



2021年10月26日 理工学部駿河台校舎タワー・スコラ輪講室にて

出席者／大川三雄 (非常勤講師・建築史)  
佐藤慎也 (教授・建築計画)  
宮里直也 (教授・建築構造)  
富田隆太 (教授・建築環境)

### はじめに

佐藤／桜建会は来年に創立100周年を迎えます。それを記念して、桜建会のHPを整備して、100年間の内容を充実させる予定です。そして、90周年のときにつくった各専門分野の系統図である日大山脈を更新しようと思っています。10年前の特集では、各専門分野ごとに系統図をつくりつつ、歴史を振り返っていただきました

が、今回は学部学科ごとに理工・建築、理工・海建、工、生産工、短大の5つに分けて振り返ってみようと考えました。

初回の今回は、理工学部建築学科です。約半世紀大学で教鞭を執る建築史の大川先生、大学に来てから四半世紀の僕、そして、40歳代の宮里先生と富田先生においでいただきました。

## 「一大イベントだった」 フジタ・都市講座



駿河台校舎9号館901講堂で行われた磯崎新氏の準講演につめかけた学生たち(『フジタ・都市講座報告書』より)

### フジタ・都市講座 講師と講演会テーマ

第1回 フランチェスコ・ダル・コオ 1992.04.15  
Two Metaphorical Cities:  
Aldo Rossi and Carlo Scarpa

第2回 伊東豊雄 1992.05.26  
Architecture in a Simulated City

第3回 ホルヘ・シルベッティ 1992.06.17  
Unprecedented Realism: The Architecture of  
Machado and Silveti

第4回 レオン・クリエ 1992.10.14  
The Future of the Megalopolis

第5回 レム・クールハース 1992.11.07  
OMA: 4 Urban Projects: "Lite" and "Heavy"  
Urbanism

第6回 ダニエル・リベスキント 1992.12.16  
On the Three Urban Projects

第7回 ラファエル・モネオ 1993.04.14  
On the Nature of Architecture: Site, Time and  
Specificity

第8回 クリスチャン・ド・ボルザンバルク  
1993.05.12  
The City: Age Three

第9回 磯崎新 1993.09.27  
City Vanishing

第10回 リカルド・レゴレッタ 1993.10.13  
The City and the Architect

第11回 マイケル・ロットンディ 1993.11.18  
Into the Work

第12回 アルヴァロ・シザ 1993.12.15  
Three Works in Historic Centers

日付は公開講演会開催日

佐藤／まず、大川先生に、当学科のメルクマールになる出来事をお話いただけますか。

大川／最初に私が大学に入ったころの話をする、同世代が本杉省三先生、井上勝夫先生、それから宇杉和夫先生、1年下に渡辺富雄先生。先輩では、計画系に石田道孝先生と柳田武先生、構造では白井伸明先生、安達俊夫先生がいました。

大学に半世紀くらい在籍しましたが、印象に残っている方としては、戦後の理工学部建築学科を築き上げた功労者の市川清志先生がいます。ずいぶん長く主任をやっていたらして、若い先生から交替の声が上がって、耐震工学の世界的権威の田治見宏先生に代わりました。それ以降は、計画系と構造系の先生が交互に主任をやるようになった。そういう体制は、あのころにつくられました。

うちの大学は戦前から「構造の日大」で通ってきました。私が大学に入ったころは、田治見先生や榎並昭先生をはじめ、錚々たる構造系の重鎮がいらして、授業なども構造の分野が手厚い体制でした。その後、主任になられた木村翔先生が、計画系の研究室をもう少し盛り上げたいと努力されたんです。

いちばん印象的だったのは、ゼネコンのフジタが後ろ盾になって行われた「フジタ・都市講座」(1992～93年度)でした。卒業生であるフジタの社長から、かなりの寄付をいただいたんですね。それで、木村先生の東大時代の同級生である磯崎新さんをモデレーターとして、当時を代表する建築家や評論家などを招待すること

を、2年間続けました(その後、1994～95年度にPart.2も実施)。対外的にもとても注目を集めた企画ですし、学内にいた学生にもとても影響を与えたと思うんですよ。今大学にいる田所辰之助先生や短大の矢代眞己先生が大学院博士課程のころですし、佐藤先生は学部生でしたか。

佐藤／大学院生でした。

大川／そうした学科あげてのイベントの中で、学生が刺激を受けていい社会人として育っていったように思います。

佐藤／僕は大学院生で、まさに当事者でした。とにかく毎月、世界的に有名な建築家がある。それは、レオン・クリエやダニエル・リベスキントなど、建築の雑誌に登場するような名前もよく知っている人たちでした。週に3回、公開講座を含めた同時通訳による英語のレクチャーを3、4時間くらいずつ聞いていました。貴重な時間ではありましたが、だんだん麻痺して行って、「また来るのかよ～」と嘆いていた。(笑) そんな想いもありつつも、やはり、いろいろ勉強になりました。とても有名な人も、会って話をすればひとりの人間であって、対等に話をしてもらい、神格化しないで済むようになりました。どんな人も、同じ地平にいると思えるようになった。今思うと、だれが来ても構えることがなくなったひとつのきっかけとなったのだと思います。非常に貴重な機会でした。

大川／フジタの都市講座は、構造系や環境系の人たちには、どう受け取られていたんでしょうか。

富田／私は木村研だったので、入ったときから、木村先生の書棚



にそのドキュメントがずら一つと並んでいたのを覚えています。とても印象的でした。

宮里／講座をやっていたころは、僕らはまだ学生じゃなかったから、そういう内容ははじめて知りました。

富田／そう、記録としてあることは知っていたけどね。

宮里／大川先生が助手になったのが 1975 年と言っていました、それは、僕が生まれた年です。(笑)

富田／僕も研究室に入って、ドキュメントで見たり、先輩たちから、「スケールが違う」という話をよく聞いていましたよ。

宮里／構造系には、ドキュメントもなかったです……。

佐藤／僕なんか、当事者過ぎて、もはや、スタンダードな感じでした。言い方が悪いけれども、スケールが大きいと思わなかった。

大川／本当に、当時の建築界を代表する錚々たるメンバーですごかったもの。

宮里／例えば、今の「オウケンカフェ」みたいなものですか。

佐藤／そうね、そのワールド版かな。

宮里／映像とか、ないんですか。

佐藤／残っているはずなんだけど、どこにあるかわからないんだよね。レム・コールハースも来たんですよ。彼は通常、自分の完成した作品のレクチャーはしないとされていた。プロジェクトの話しかしないんだけど、そのときだけ、学内の、非公開という条件だからだと思うけど、「君たちは日本にいて、なかなか見に来れないと思うから」と、いつもは話さない完成した作品の紹介をしてくれた。ロッテルダムの美術館(クンストハル)とパリ郊外の住宅(ヴィラ・ダラヴァ)のことを話してくれたことを、今でもはっきりと覚えています。20 年以上後になって、その住宅を Google で検索して、見に行きましたよ。これが、あの住宅か、と。感慨深かったですね。

宮里／その当時、スゴイ方々を呼んできてたんですね。

富田／それだけスゴイ話を聞いていると、海外への意識は強くなるんじゃないですか。

佐藤／その当時は自覚はなかったけど、今考えるとそういうことだったのかもしれないね。

大川／その時期の少し後に、高宮眞介先生が専任の教授となり、1996 年度に着任され、研究室を持つときに助手として佐藤先生が入ってきたんですよ。

佐藤／高宮先生は、僕が大学院生のときに、非常勤で設計を教えていたので、個人的にも親しくさせていただいていた。みんなで高宮先生の作品を見学するために旅行へ行ったり。谷口吉生氏の事

務所では、高宮先生は近寄りにくい存在だったそうですが、大学に来るとリラックスしていたのかもしれない。それで、高宮先生が大学の専任になるということで、本杉先生の助手と兼任するかたちで呼ばれ、それがきっかけで大学に戻るようになりました。そのときの主任も木村先生でした。

一方で、駿河台校舎の新 1 号館の設計を実現させたのは都市計画

の小嶋勝衛先生だと思うんです。1 号館は、理工学部の顔となる建築なので、建て替えるのであれば、やはり卒業生に任せるべきと考え、高宮先生に白羽の矢が立ったんだと思います。

1 号館のことは高宮先生もかなり意識されていて、研究室で最初に指導した学生の修士設計が、旧 1 号館の改修だったんです。そのときは、1 号館の外壁を保存したままセットバックさせて、ガラスで覆い、ボリュームを載せて高層にしていた。傍から見て、「新しい 1 号館のスタディをしているのでは」と思いました。

大川／そうなのですか。

佐藤／そのときの指導のことと、実際に 1 号館を設計しているときに考えていたことは、かなりシンクロしているように思います。当然、敷地が一緒で、法的な条件も一緒だから、答えも同じようになると思います。

大川／私は、ずっと、建て替えには反対していました。学部長だった小嶋先生や、高宮先生と話しました。ぼくは残した方がいいと言ったんですが、高宮先生は「建築としては 1 号館は B 級だよ」と言っていました。私は、「いや、建築としては B 級だけど、うちの大学にとっては記念性という点で超 A 級の価値がある」と言い続けましたが、残念ながら、残せなかった。建築史の立場からいうと、駿河台キャンパスの中で歴史的な価値があるのは、1 号館と 5 号館だと説明しました。小嶋先生としては、これからの大学に必要な施設を考えると、1 号館と 5 号館の両方は残せない。「僕にとっては 5 号館の方が思い入れがあるから、

5 号館を残したい」と言われました。

佐藤／そうだったんですか。それで、5 号館は耐震改修をしたんですね。

大川／せっかく改修したのに、壊してしまいました。結果的には、歴史に価値のあるものはひとつも残さず、壊しているばかりですね。

佐藤／今の 大川先生の話聞いて、高宮先生は、もちろん建築家として、本当に旧 1 号館を B 級だったと思っていたと同時に、新 1 号館を設計したいという気持ちもあったのではないかと思います。そして、建築学科教授のみんな、小嶋学部長に、建築学科の教員が 1 号館に関わることができるようにお願いをしたそうです。

1 号館は、高宮先生が建築全体をまとめ、構造を斎藤公男先生、対震を石丸辰治先生、設備を早川眞先生が監修し、ホールの音響を木村先生、計画を本杉先生が担当し、旧 1 号館の記録とか、部分保存などを大川先生が担当して、教員みんながそこに関わっていました。その下で、僕はベンチをデザインしたり、岡田章先生に正面入口のアーチを保存するための構造を担当していただいたりしました。

そういうことが 1 号館の建て替えるころはありました(2003 年度使用開始)。大学の校舎を教員が協力してつくった時代でした。しかし、このタワー・スコラになると、状況は異なってきます。

宮里／そういうかたちで教員たちが協力してつくったのは、船橋のテクノプレース 15 くらいまでですよ。

富田／船橋の 10、11、12 号館は、若



旧 1 号館。正面入口の尖頭アーチは、解体時に保存され、新 1 号館のロビーに展示されている(『旧 1 号館の建築』より)



2018 年に卒業生や在校生、教員が「5 号館の葬式」というイベントを行った。そのイベントを特集した桜建会報の表紙



Ookawa Mitsuo  
1950 年群馬県生まれ。73 年理工学部建築学科卒業。75 年大学院博士課程前期修了、同年より助手として近江栄先生の研究室に入り、2008 年より教授。建築史家。専攻は日本の近代建築史。主な著書に『図説 近代日本住宅史』(鹿島出版会)『建築モダニズム』(エクスナレッジ)『近代和風建築』(建築知識社)など。

## 駿河台校舎 1 号館の建て替え

色峰郎先生たちですよ。

宮里／ああ、あの廊下で迷子になる校舎ですね。(笑)

富田／あれは、学生のときの印象に残っています。

大川／駿河台の 9 号館は関澤勝一先生たち。7 号館が小谷喬之助先生。

佐藤／船橋の図書館は小林美夫先生、スポーツホールは若色先生が関わっていました。

大川／1 号館の建て替えのときはどうしていましたか。

宮里／われわれは 1 号館を使っていない世代なんです。船橋校舎に 2 年間通って、3 年生から駿河台に移っても、ぜんぜん 1 号館は壊されないし、どうなっているんだろうと思っていました…。

佐藤／古い方も、新しい方も、使っていないのですか。

宮里／そうです。たまに、上階の教室で試験だけ受けていました。

佐藤／1 号館を解体して新築するまで、設計以外の授業は、すべて船橋でやっていた時期がありましたね。

宮里／僕は船橋に住んでいて、2 年生のころは週に 1 日、長時間かけて駿河台に通っていました。そんなことが、5、6 年続いたんです。

富田／僕は宮里先生よりひとつ下の学年だから、2 年生のときに、船橋に東葉高速鉄道が開通した。それをすごく覚えています。こんなに速くなるのかって。船橋日大前の駅舎も先生方が関わっていま

したよね。

宮里／そうそう、デザインは社会交通工学科(現交通システム工学科)の伊澤岬先生で、構造は齋藤先生。いや、本当に開通前は通うの辛かったですもの、遠くって。

佐藤／ぼくも船橋へ行くときは、2 時間半はかかっていますね。

富田／先生方はよく船橋に泊まっていたと聞いていましたが。

大川／そうね、1 限の授業があるときは、泊まっている先生もいましたね。朝は津田沼からのバス路線は渋滞していたしね。

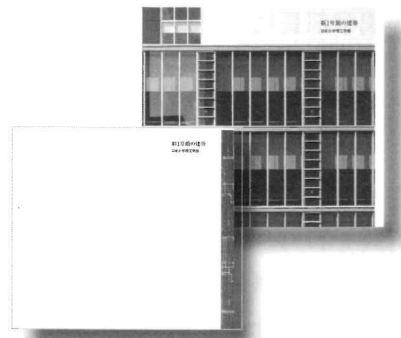
宮里／だから、われわれは、旧 1 号館にはあまり思い出がないんですよ。佐藤先生とは、旧 1 号館の入口アーチの保存の仕事をしました。今、モニュメントとして 1 号館に展示されていますね。僕がドクターのころでした。

佐藤／宮里先生の研究室の齋藤先生や岡田先生には、よく使われたというか、さまざまなプロジェクトに声をかけていただきました。そんな関係もあって、宮里先生が院生のころからよく付き合っていました。最近も宮里先生とは、船橋キャンパスに、新しい理工学部のロゴをデザインした野老朝雄さんによるモニュメントとともに、ベンチをつくりました。

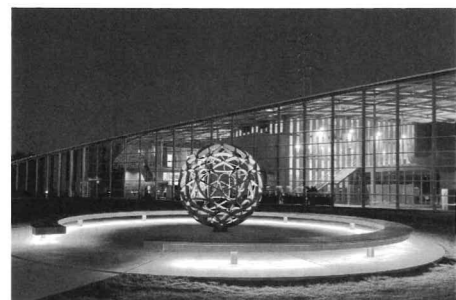
大川／振り返ってみて、高宮先生の参入と新 1 号館の完成は、理工建築を盛り上げる大きなイベントだったなと思います。



新 1 号館正面 (写真/北嶋俊治)



建築学科が総力をあげて制作した新旧 1 号館の記録冊子



野老朝雄氏による「CST SPHER FUNABASHI」。設計協力は佐藤教授と宮里教授

## JABEE の試行と目指す大学教育

大川／木村先生後の齋藤先生が主任だった時代の印象としては、

「JABEE(日本技術者教育認定機構)」の試行でしょうか。

\* JABEE / 1999 年に設立された、高等教育機関の技術者の教育プログラムの審査・認定を行う民間団体の略称。正式名は、一般社団法人日本技術者教育認定機構。(英名: Japan Accreditation Board for Engineering Education) 認定するプログラムを修了すると、技術士の第 1 次試験が免除される。

最近あまり聞かない「JABEE」ですが、第三者機関が技術者教育について規準をつくり、教育プログラムを審査するものです。いろいろ試行をして、結局、うちの学科は JABEE の認定は受けなかったんです。だけど建築学会の方から、都内にある老舗の大学だから、ぜひ試してくれないか、と声がかかり取り組みました。学科では大騒ぎをしたんです。とても印象に残っている出来事です。

うちの大学はどういう大学なのか、ということを確認する絶好の時期だった。学科全体が人間ドッグに入ったような状態で、うちはこういう問題を抱えているんだ、ということが見えてきた。あれをきっかけに、各分野でカリキュラムを見直したり、全体を見直したりと、すごく大きいインパクトがあった。

身近な話として、建築史教育のことを言いますと、建築史の授業はものすごく充実をされていて、他の大学だと、2 年生の前期が日本建築史、後期が西洋建築史で終わりというケースが多いのですが、うちの場合は日本建築史、西洋建築史、近代建築史、それに東洋建築史まである。それらを建築教育全体の中にどう位置付けるか、片桐正夫先生ともよく議論した覚えがあります。

1 年から 4 年まで、すべての学年に歴史系の授業があって、1 年生のときは建築入門としての意義、2 年では基礎教養としての位置付け、3 年からは専門性を高め今日的なテーマに即したスタイルにした。4 年では、重枝豊先生が担当している保存修復論のように、設計や計画にも直結した学問として位置付けていきました。

富田／僕はそのとき、ちょうど助手

になって 2 年目で、先生方が熱心に取り組んでいる姿を見ていたんです。だから、なんで途中で止めちゃったんだろうと思っていた。こんなに準備をして、蜂巢浩生先生なんて、夏休みを全部潰してやっていた。

宮里／4 号館の 3 階に特別室ができていて、ぼくはドクターの時代でしたけど、岡田先生を手伝っていました。講義の資料集めたり。

佐藤／僕はそういうのはやらなかったな。

富田／そんなこと言って、やってたと思いますよ。

宮里／岡田先生、蜂巢先生、橋本修先生とかが中心にやられていたと思います。

大川／それで、計画系では講座が足りないということで、ランドスケープ系を入れたり、インテリア系を入れたりしました。

佐藤／それは高宮先生が中心となって取り組んでいました。JABEE は国内のものですが、設計者の養成という点で、国際的なフレームの中で考える必要性を説いていました。JABEE に乗っかって、国際的な要件を被せようとして、カリキュラムを拡大させたんです。

しかし、一方で、日本の大学教育では、環境や構造も含めて全体でやっていくものだから、目指していた教育とのギャップが大きく、結局、元に戻りました。反対に言うと、日本における建築教育が、環境だけ、構造だけ、設計だけじゃなくて、当時、「ホリスティック」という言葉を使っていたけど、包括的な教育として、むしろ全体的なことを学ぶことが、日本の建築教育のよい点と考え、そちらに舵を切ったという結論になったんでしょう。

宮里／最初は、コースに分かれて、



Satoh Shinya  
1968 年東京都生まれ。92 年日本大学理工学部建築学科卒業。94 年同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。94～95 年 I.N.A. 新建築研究所。1996 年より日本大学理工学部建築学科。



かつ、大学院まで含めて6年間で、設計教育を国際的な枠組みをもっていこうとする話でしたよね。

佐藤／日本では対応できないというよりは、建築教育がデザイナーに特化されるのではなく、エンジニアリングも無視しないようにしたい。ヨーロッパの建築家は、デザインを

中心に行い、技術的なことはエンジニアに任せるタイプだけど、でも、そうじゃない日本のあり方を目指したんです。

宮里／日本の一級建築士試験の制度も、全部やりますものね。元々そういう枠組みなんですよ。

## 建築教育の特色と 目指す方向

佐藤／教育とは直接関係ないかもしれないけど、建築のデザインにおいて、1990年代から2000年代までは、構造的なチャレンジがないと、新しい建築デザインは成立しないと考えられていたように思います。ですから、構造設計者がすごく注目されたし、建築家たちとともにアクロバティックに見える構造を考え、小さな住宅にすら適用していました。それが、2011年の震災で変わりました。

震災以後は、そういう傾向は薄まってきたんです。ある時期までは、(柱が)細い、(壁や床が)薄いというスタイルが、建築デザインの中の美学として強かった。そのときに、ある程度エンジニアリングがわかっていないと、破綻しちゃう。力学を知っているからこそ、魅力的な構造を含めたデザインができるんですよ。

大川／そういう点で言えば、本学の卒業生はそういう優れた構造家が多いですよ。

宮里／やはり構造教育が充実しているってことですかね。

佐藤／構造教育の充実は、その教育を当たり前を受けてきた僕たちには、いまいちよくわからないのですが、本当にそうなんですか。

宮里／他大学を出ている人の話を聞

くと、われわれが習ってきたことって、異常にボリュームがあるってことがわかります。「なんで、こんなこと知っているの」とか、「こんなこと教えないよ」ということを言われますね。

富田／一級建築士の試験なんかはい例ですけど、うちの学科を出ている人は、構造系じゃなくても、基本的にあまり勉強しなくても、けっこうできちゃうようなんです。それは、個人的にも思いました。

佐藤／都市講座の話じゃないけど、時間数多く授業を受けていることの見えない効果があるんですかね。

宮里／さっきの歴史の話と同じじゃないですか。構造の科目もたくさんあって、充実しているんです。ちゃんと受けた人にとっては、いいシステムだと思います。ということは、先生方はよく働いているってことですよ。(笑)応用力学と構造力学が分かれていて、これだけ充実しているところは少ないですよ。昔から、ずっとその枠組みが続いているってことですよ。

佐藤／学生数も多いから。

宮里／そうです。材料、地盤の先生もいれば、振動、RC造、S造、空間構造など、それぞれ専門の先生がいる。他大学ではひとりの先生が、

他の専門分野のことも教えなくてはいけないと聞きます。

大川／木村先生の環境系も先生が多いですよ。

富田／今でも橋本先生がいらっしゃいますし、短大には羽入敏樹先生がいる。生産には塩川博義先生もいらっしゃいます。圧倒的に音環境の講座は、量も多く、質も高いと思いますね。それに、私が日本建築学会の委員会に入っても、必ず卒業生の方がいる。ゼネコンなどの技術研究所に卒業生が必ずいるんです。分野によっては、委員の半分が木村研の卒業生っていう委員会もありますから。私としては、本当に恩恵を受け

ていると思っています。

宮里／エンジニアリング系の学会の委員会は、けっこう企業の人が多いですよ。大学の先生の数の方が少ないような委員会もあります。

富田／他大学では、ホール音響か、騒音か、どちらか一方のことが多いのですが、うちの大学は両方いるんで助かります。ハウスメーカーの研究所も多いし、そういうつながりで卒業生が学生をリクルートもしてくれるので、それもありがたい。すごいことです。

佐藤／日大は、スケールメリットがあり、それはよいところですよ。

## 建築教室の この10年



ERIホールディングスのレジメ表紙

大川／宮里先生、富田先生のおふたりにとって、ここ10年の気になるところは、ありますか。

富田／先ほどの都市講座のスケールから見れば小さいかもしれないけど、井上先生がERIホールディングス・建築・都市と環境の寄付講座、将来の建築技術と技術者の養成として大学院の特別講座をはじめました。井上先生もあの都市講座を見ていたと思うんですよ。それで、コンセプトは、設計事務所とか、ゼネコンとか、とにかく、いちばんエライ人と呼んで直接話を聞くんです。トップの人に学生が会うことによって、そのパワーをもらうという。やっているときは、事務作業ばかりやっていたので、辛いなと思っていましたが、振り返ってみると印象に残る講座でした。毎年、ドキュメントもつくっていました。4、5年続けました。

宮里／都市講座にある意味で似てい

いますね。(笑)

富田／学生のためには、本当にいい講座でした。大学院生のために特化したので、会社の役員の人とか、興味を引く話し方をされて、おもしろかったですね。

佐藤／大学だけじゃなく、社会でもいろいろ学ぶ必要はあるのだけど、なかなか、そういう協力をしてもらえるところは多くありませんね。そして、富田先生が言うように、たいへんなんですよ、ちゃんと準備をして続けるのは。ルーティン以外のことが加わるのだから、負担が増える。企業に余裕がない中で、今後、そういう機会をつくる場所は、桜建会以外にないように思うんですよ。都市講座では、フジタという企業から寄付していただけたので、大きな予算がかけられました。今では、大学に対して多様な活動を支援する組織というと、卒業生の会である桜建会くらいしかないような、そんな気



Miyasato Naoya  
1975年宮崎県生まれ。1998年日本大学理工学部建築学科卒業。2000年同大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学科修了、2003年同後期課程修了。04年から構造計画プラス・ワン。08年より日本大学理工学部建築学科。

がしますよね。

大川／どういうきっかけづくりが、可能でしょうか。

富田／私は学会なんかでいつも提案するんですけど、一回も採用されたことはないんですが(笑)、小学生とか、中学生向けに、建築だったり、音の理科実験のようなものができないかと考えています。そういうのをコンペする場所があったらいいなと、いつも思っています。

なぜかという、小中学生で、そういう賞状をもらうと、一生忘れない思い出になりますし、大学や学会の名前を知ってもらえる機会になる。それが、いいフィードバックにもなるし、専門家がいるんだからやりとりは確かだし、子どもにも夢が与えられるんじゃないかと思うんですよ。いろんなところで言っているんですけど、なかなか実現しません。宮里／佐藤先生は、日本大学全国高等学校・建築設計競技の担当をやっていましたよね。あれは、けっこう認知度は高いんじゃないですか。

宮里／今、新カリキュラムでは、複数の系の教員が集まって担当する科目を設置しましたから、この先ちょっと変わるのではないかと考えています。学科教員を分野横断で集めて実施します。はじまるのは2023年からです。

富田／私としては、全員必修の卒業設計を復活させた方が絶対よいと思うのですが。

佐藤／ぼくらの学生のころは、全員が卒業論文と卒業設計をやらなきゃならなかったんですが、どちらか一方でいいということになった。

佐藤／どうなんだろうね。あと2回で80回になります。

宮里／スゴいな。その環境版とかつくったら。

富田／いや〜。あと、建築学科の教員全体でなにかをやるっていうことが、ないんですよ。

大川／そうなのよね、教員は、どうしても専門の中に閉じこもってしまう傾向がある。横のつながりもあまりないしね。振り返ってみると、ひとつの目標や、ひとつのテーマが出現したとき、すごく盛り上がるけど、ふだんは、みんな、という動きにはならない。

佐藤／それって、今では、どういうことができると思いますか。

富田／たとえば、環境でいうと、みんなでエネマネハウスをつくるのか。難しいでしょうけど。

佐藤／なにか具体的なものをつくるということの中で、やった方がいいのでしょうか。

富田／やりやすいですよ。ものがあつた方が入りやすい。

富田／あれは大事ですよ。加えて、その指導に、正副の先生がつくのもおもしろくって、私は正が井上先生で、副は安達先生だった。4年生としては、研究室の先生以外の先生とコミュニケーションがとれる。それがとっても大事でした。

宮里／それで言うと、3年生の後期は比較的時間があるから、4年前期までに実施することもできますよね。

佐藤／難しいのは、授業の中で分野横断的なことをやる場合、教える側としては、それが理想と思うのだけど、どうも最近の学生はそれを望ん



タワー・スコラ内で行われた設計授業の講評会の様子(2018年 写真/川瀬一絵)



駿河台校舎のタワー・スコラを本郷通りより見る。5号館、広場、9号館、6号館(図書館)のあったところへ、18階建の校舎が建ち、建築学科の研究室と講義スペースが整備された



Tomita Ryuta  
1975年千葉県生まれ。1999年日本大学理工学部建築学科卒業。2001年同大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了、同大学理工学部助手。07年同大にて博士号取得。18年より教授。専門は、建築環境工学(音環境・環境振動)。共著に『建築物の振動に関する居住性能評価規準・同解説』(丸善出版)、『基礎教材 建築環境工学』(井上書院)など。08年日本大学理工学部学術賞。

でいるのか、と懐疑的になる。こっちが理想的に、ある意味、学生に負荷のあるプログラムを考えれば考えるほど、学生たちは、さーっといなくなっちゃう。

宮里／確かに。

佐藤／正直に言って、そのバランスが難しい。

大川／うちは手をかけすぎている感じもある。教える方も、教えられる方も、もう少し余裕があればいいと思うこともある。最近、先生方の交流も減ってませんか。

富田／減りましたよね。

大川／昔はもうちょっとありましたよね。

富田／昔は教員旅行なんてものもありました。

大川／年に一度くらいは、じっくり話し合う機会があってもイイよね。

佐藤／今はなかなか、そんなに接点がない感じで。教室会議で、月に一度、教員が集まるんですけど、そこでなにかが深まることはないし。

宮里／教員だけじゃなくて、学生同士も同じ部屋にいるとは思えない反応をしますよね。他人ばいというか。富田／興味がなくなってきているとか。

宮里／最近特にそう思います。みんな同じことをやっているのではないって思うのですが、いや、そんなつもりはないです、みたいな。大丈夫かな、と思います。

富田／われわれも少し親切過ぎるのかもしれない。困ると、すぐにこちらに来るでしょ。昔はまず友人や先輩に聞いたじゃないですか。

佐藤／逆に、先生に対して聞くことに躊躇がない。

宮里／確かに。

佐藤／悪い言い方をすると、効率を

優先させているような気がする。いちばん早い方法を選んでいる。

宮里／なるほど。すぐに回答を求めますね。論文で結果が出ると、次はなにをすればいいですかって聞いてくる。少しは自分で考えてみたら、と言いたくなりますよね。

佐藤／なにかをはじめるときに、「このようにやろうと思うのですが、この方法って正解ですか」って聞いてくるんです。

宮里／そうそう。

佐藤／だから、失敗はしないですよ。失敗してもまわりは責めないし。宮里／素直でいい子が多い。やんちゃな子がいなくなりましたね。

大川／学生気質の変化だけでなく、18歳人口の減少やコロナ禍の教育態勢など、これからどうなるのか心配です。教員間での危機意識が共有されていないような気がします。今、受験生に人気のある大学って、なにか新しい試みをやっている。うちは、そういうのが、ぜんぜん見えてこないですよ。これからの5年くらいが勝負だと思います。

佐藤／その意味では、以前は3、4、5、9号館と分散していた研究室が、2008年度より、5号館の対震改修とともに1棟の中に集約され、さらに今村雅樹先生が監修したタワー・スコラが竣工して、2018年9月に全研究室が引越してきました。桜建会のご協力もいただいた建築学科の100周年事業として整備された3層の吹き抜けを中心として、物理的、空間的には、より近い関係になっています。今はコロナ禍もあって集まりにくい状況にありますが、これからは意識の面でも、あらためて学科の教員が一体となっていく必要があるのかもしれない。

## これから先の10年

## 研究室紹介

研究テーマ **フィールドワークから都市-建築-人の営みを学び、計画に還元する**

研究室名 地域デザイン研究室 井本ゼミ

教員名 助教・井本佐保里

キーワード 災害復興/地域デザイン/スラム/子ども施設/フィールドワーク

企業等への要望 共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等

研究概要 井本研究室は、1. 自然・人的災害からの復興デザイン、2. スラムなど貧困地域の持続可能な居住環境のデザイン、さらに3. 地域に寄与することのできる子ども施設計画のデザイン、の3点を大きなテーマとし、調査研究・実践を行います。インタビューや実測調査などのフィールドワークを通して地域を理解し、各地域の中で建築が果たす役割の可能性や手法について考えます。

①自然・人的災害からの復興デザイン：近年国内外で頻発している自然災害の被災地域を対象とした、居住者の再建の意思決定プロセス、災害復興計画の評価、将来の災害に向けた事前復興に関する調査研究

②スラムなど貧困地域の持続可能な居住環境のデザイン：世界のスラムや難民キャンプを対象とした、持続可能な居住環境の構築を目指した調査や、調査結果を活かした実践（現地でのワークショップ開催やセルフビルドなど）

③地域に寄与するための子ども施設計画のデザイン：子ども施設を中心とした施設建築が地域の中で役割を担うための計画に関する調査研究・実践

連絡先◎理工学部駿河台校舎タワー・スコラS815 TEL:03-3259-0717 E-mail: imoto.saori@nihon-u.ac.jp

研究テーマ **都市計画に関する研究、居住空間・住環境に関する研究、パブリックスペース・エリアマネジメントに関する研究、都市景観・アーバンデザインに関する研究など**

研究室名 都市計画研究室

教員名 教授・根上彰生、教授・宇崎勝也、助教・泉山壘威

キーワード 都市計画/アーバンデザイン/まちづくり/環境・防災都市/パブリックスペース/エリアマネジメント

企業等への要望 共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等

研究概要 当研究室は、笠原敏郎、市川清志、小嶋勝衛と引き継いできた、法・事業制度の研究、商業地・商業施設の研究を始め、自転車、都心居住、都市景観、アーバンデザインなどの多様な研究テーマをカバーし、令和2年度に着任した泉山助教を中心に、現在注目されているウォークブル・シティやパブリックスペース、プレイスメイキングにまでテーマを広げています。

社会状況は刻々と変化し、新たな都市問題が急に出てくることも珍しくありません。全ての課題を都市計画で解決することはできませんが、多くの課題が「都市」と関係していることは間違いありません。日々の現実を直視し、新たな制度などを受け入れ、人びとが安全・安心に暮らし続けられるよう、研究課題を見出し、真摯に取り組み、その解決策の提示を目指しています。

また、都市計画の教員は地方公共団体などの審議会・委員会の委員に任命されることも多く、その関係で住宅マスタープランや空家対策、ウォークブル・シティなどのテーマに学生とともに取り組むこともあります。多様なテーマに柔軟に対応し、研究領域の拡大を図るとともに、社会の要請に応えられるよう教員・学生がともにチャレンジしています。

連絡先◎理工学部駿河台校舎タワー・スコラS803・S804・S805 TEL03-3259-0967 E-mail: izumiyama.rui@nihon-u.ac.jp

## 研究室紹介

研究テーマ **建てること・住まうこと**

研究室名 意匠・計画研究室

教員名 准教授・篠崎健一

キーワード 空間/空間図式/身体性/一人称研究/行為の概念/リビングラボ/ランドスケープ/地域創生

企業等への要望 共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等

研究概要 開設10年の研究室である。世界の多様な環境下で建築の意匠設計実務に携わり、着任後は研究のフィールドに軸足を置く。テーマは、空間の創造と存在で、建てることと住まうことについて考えている。



ラオスのゲオパトゥ村の住居

フィールドに出た認知科学<sup>1)</sup>に刺激され、一人称研究<sup>2)</sup>を探究の基盤に据えている。フィールドは複雑多様で新たな気づきに満ちている。固有と普遍が共存する。空間図式の身体的原型の探究<sup>3)</sup>(認知科学2015)、ラオス山岳少数民族の住居空間のかたち<sup>4)</sup>(建築学会計画系論文集2017)、琉球の伝統的珊瑚石垣の築造による共創<sup>5)</sup>(同2021)、多様なアクターの参加と地域マネジメントによる地域創生(人工知能学会大会2019他)などを発表している。

沖縄本島北部離島の集落伊是名(いぜな)と、ラオス北部山岳少数民族の集落ゲオパトゥに足しげく通い、2017、18年には伊是名にリビング・ラボ(臨地研究室)を開設し、emic(イームック(内部の))な視点からの探究を試みている。複数研究の同時遂行によるインタラクションを目論んでいる。

琉球の伝統的集落空間と民家の悉皆調査により、実測図面と住まい手の語りを多く収集している。そこから、行為の概念に基づいて、民家改修の特徴を理解し、伝統性継承の可能性を議論しようとしている。1000ページを超える調査報告書や石積みマニュアルは、村、地区(集落)民に好評である。千葉県鴨川市の文化財を核とした地域再生にも継続的に取り組んでいる。

1) 特集「フィールドに出た認知科学」編集にあたって <https://ci.nii.ac.jp/naid/130005099420>

2) 一人称研究のすすめ: 知能研究の新しい潮流、近代科学社、2015.4.

3) 空間図式の身体的原型の実地における空間体験に基づく研究、写真日記を基礎資料とするKJ法の試み、認知科学、vol. 22, no.1, pp. 37-52, 2015.3. <https://ci.nii.ac.jp/naid/130005099417>

4) ラオス北部ゲオパトゥ村のモンの住居と地形の関係、山岳少数民族モンの集落空間構成の基本となる空間図式の探究、日本建築学会計画系論文集、第82巻、741号、pp. 2827-2836, 2017. 11.

5) 写真とことばによる表現を用いた実践の省察を通して臨床の知を顕在化する試み、日本建築学会計画系論文集、第86巻、779号、pp. 345-355, 2021. 1.

連絡先◎生産工学部建築工学科4号館206号室 TEL:047-474-2485 E-mail: shinozaki.kenichi@nihon-u.ac.jp



## 事務局だより

### 事務局の活動について

現在の桜建会は、新型コロナウイルス感染症の状況を鑑み、例年行われているさまざまな事業が、延期や中止となっております。

今後について、いまだ見通しのつかない状況ではありますが、徐々に開催に向けて計画中です。会員の皆さまには、ご案内ができ次第、その

都度お知らせをいたします。

また、現在桜建会事務局は、原則、火曜日と木曜日に在室しております。お問い合わせなど、何かございましたら、在室日(10:00~16:00)にお電話をいただくか、メール(info@okenkai.jp)にてお問い合わせください。

### 2021年度 秋季ゴルフ大会

本年11月19日(金)に、埼玉県武蔵松山カントリークラブにて、秋季ゴルフ大会が開催された。感染リスクを最大限回避する対策を講じ

た上で開催された今回は、参加者は13名、優勝者は金田隆浩氏、準優勝は畑中勝美氏で、矢澤一重氏であった。



秋季ゴルフ大会・全員集合

### 新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名/卒業年/勤務先 (令和3年6月9日~11月10日) 1名

高橋 孝二 理工建-H4 日本大学工学部

桜建会報 NO.122 2021-December  
発行人 岩崎俊治  
編集 桜門建築会広報委員会  
〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14  
日本大学理工学部内

広報委員会  
委員長 佐藤慎也(理工学部建築学科)  
副委員長 塩川博義(生産工学部建築工学科)  
矢代眞己(短期大学部建築・生活デザイン学科)  
委員 大川三雄(理工学部建築学科)  
山本和清(理工学部海洋建築工学科)  
亀井靖子(生産工学部建築工学科)  
高橋岳志(工学部建築学科)  
北川健太(セカイ)  
大西正紀(mosaki)  
西山麻夕美(フリー編集者)

桜建会事務局  
住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。  
理工学部駿河台校舎タワー・スコラ7階708奥  
TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216  
E-mail kaiin@okenkai.jp  
ホームページ http://www.okenkai.jp/  
専任/星野麻衣子  
非常勤/櫻井佐和、大木明子  
業務時間/AM10:00~PM5:00(月~金)

## 学部ニュース



### トピックス①

◎川崎浩長さん(パルク研 M2)が、「2021年一般社団法人日本建築材料協会 優秀学生賞(大学院・大学の部)」を受賞した。



◎浦部智義教授と浦部研究室が「建築・空間デザイン分野で応募した病院・医療関連施設「Smart Wellness Town PEP MOTOMACHI」が、「キッズデザイン賞優秀賞(少子化対策担当大臣賞)」を受賞した。

◎高橋岳志助教が、村上・AUM 設計共同体(福島県建築設計協同組合)と協働し、プロポーザル、基本設計業務を担当、森山修治教授が設備設計監修をされた「南会津地方広域市町村圏組合・新消防

庁舎(設計期間/2017-2018)」が、「令和3年度木材利用優良施設コンクール」において、林野庁長官賞を受賞した。

◎「第25回 JIA 東北建築学生賞」において、伊藤響介さん(浦部研4年)が、作品名「鼓舞するハレとケ-伝統芸能の継承による町の活性化」で優秀賞を、米山俊也さん(浦部研4年)が、作品名「蓮池をめぐる木の空間-郊外型コミュニティガーデン-」で奨励賞を受賞した。



### 海洋建築工学科トピックス

#### 訃報

◎海洋建築工学科で永年教鞭をとられておりました日本大学名誉教授の川西利昌先生(専門/海洋環境工学)が、10月23日に逝去されました。享年76歳でした。謹んで御冥福を御祈り申し上げます。



「Smart Wellness Town PEP MOTOMACHI」



### 建築学科トピックス①

◎「建築文化週間 学生グランプリ 2021 銀茶会の茶席」(主催/日本建築学会)にて、相川文成さん(今村研 M1)、稲村浩成さん(古澤研 M1)、佐々木拓海さん(佐藤光彦研 M1)が「入選」および「本阿彌守光賞(審査員賞)」を受賞した。

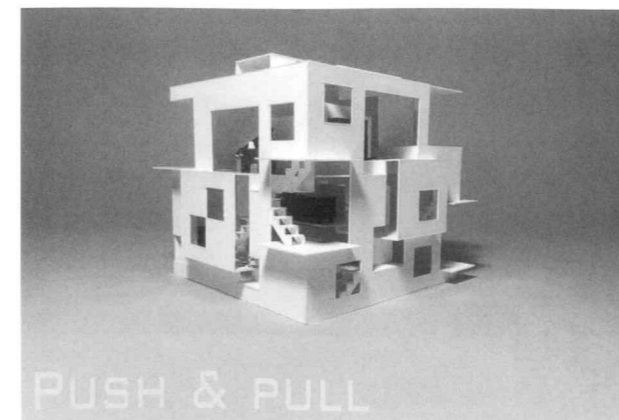
た。テーマは「ひと会」であり、公開審査会を経て最優秀賞1点、優秀賞1点に次ぐ、入選に選ばれた。

◎「日本音響学会騒音・振動研究会」において、青木怜依奈さん(冨田研 M2)が「学生優秀発表賞」に選ばれた。



### トピックス①

◎「建築新人戦 2021」において、細川日和さん(建築デザインコース2年生)「Push & Pull」が100選に入選した。



「Push & Pull」

「銀茶会の茶席」の作品と受賞者3人(P16に作品画像有)





生産工

トピックス②

◎「2021年度支部共通事業 日本建築学会設計競技」の課題「まちづくりの核として福祉を考える」(応募数300件)において、熊谷拓也さん・中川晃都さん・岩崎琢朗さん(共に岩田研 M1)の「へっこみ〇〇〇のバスまち開き-バス停から始まるまち開きシステム-」が全国入選・優秀賞、木下惇さん・井山智裕さん・荻野汐香さん(共に北野研 M1)の「アツマリバチのワケアイマチ」が関東支部入選した。

◎「第12回ハーフェレ学生デザインコンペティション2020」の「世界のどこかにたつ家」において、「水をあげる」白石せらさん(岩田研 M2)・井山智裕さん(北野研 M2)が優秀賞・成瀬賞を受賞した。



上/「へっこみ〇〇〇のバスまち開き-バス停から始まるまち開きシステム-」  
右/「アツマリバチのワケアイマチ」  
下/「水をあげる」

アツマリバチのワケアイマチ — だれかと分け合うわたしのすみかー



右/「弱波堤-日常に寄り添う小さな堤-」  
下/「野馬追通り-まちを育てる馬と共生する暮らし-」



工

トピックス②

◎奥山翔太さん(浦部研 M1)が令和2年度の卒業設計で取り組んだ作品「弱波堤-日常に寄り添う小さな堤-」は、「第1回フェーズフリーアワード2021(アイディア部門)」と「歴史的空間再編コンペティション2021」に応募し、入選した。

◎奥山翔太さん・竹井諒さん(共に浦部研 M1)・山口和紀さん(浦部研 4年)が、三菱地所設計設立20周年特別企画「+ミライプロジェクト」学生コンペ:募集テーマ「目抜き通り-そして、そこにたつ建物-」に、作品「野馬追通り-まちを育てる馬と共生する暮らし-」を応募し、東北エリア次点(優秀賞)に選出された。

理工

建築学科トピックス②

◎「建築設計VI」の作品展示をレモン画翠1Fショーケースにて行った。出展者は、古秋林さん、武井翔太郎さん(佐藤光彦研 4年)、伊藤菜々子さん、久米夏子さん、先崎亜美さん、新倉未友さん、藤井朋美さん(山中研 4年)、有賀未貴さん、榎本海月さん(今村研 4年)、山下紗輝衣さん(佐藤慎也研 4年)、元木颯香さん(二瓶研 4年)、森本あんなさん(根上・泉山研 4年)。



左/「建築設計VI-学生とアートがつくり出す新たな御茶ノ水-」、下/「銀茶席の茶会」

